

Mark Reasoner, *Romans in Full Circle:*
A History of Interpretation (Louisville, Kentucky:
Westminster John Knox Press, 2005)⁽¹⁾

伊 藤 明 生 (東京基督教大学教授)

本書の著者マーク・リーズナーは宣教師の子供として1960年に東京衛生病院で生まれた。父親はローリン・リーズナー師で、センド国際宣教師団宣教師として日本で宣教活動に従事した方で、東京基督教大学の前身校東京キリスト教短期大学で教鞭を執ったこともある。現在著者は、米国ミネソタ州セント・ポールにあるベテル大学 (Bethel University) の准教授 (associate professor) として新約学、聖書神学などを教えている。博士号はシカゴ大学神学院で取得し、H. D. ベッツ教授が指導した学位論文は *The Strong and the Weak: Romans 14.1 — 15.13 in Context*⁽²⁾ と題して国際新約学会モノグラフ・シリーズ103 (Society for New Testament Studies Monograph Series 103) として出版されている。

本書では、パウロのローマ教会宛の手紙の解釈の歴史が概観されているが、神学校などでローマ人への手紙を教える際に、副読本として利用して学生たちの理解を深めることを著者は目指している。より具体的には、ローマ人への手紙の中で解釈が難しく様々に解釈され、また神学論争のタネとなった箇所を選び、主要な神学者たちがそのような箇所をどのように解釈したかを著者は概観している。主要な解釈者として取り上

(1) 中表紙、目次、序、略号表、イントロなどに26頁、本文に149頁、巻末注は151頁から177頁まで、巻末の各種索引は179頁から194頁までである。

(2) Cambridge: Cambridge University Press, 1999.

げられているのは、オリゲネス、アウグスティヌス、ペラギウス、アベラルド、トマス・アクィナス、マルティン・ルター、エラスムス、ジャン・カルヴァン、カール・バルトで、バルト以降としては、E. P. サンダースと J. D. G. ダンに代表される新しい視点 (new perspective)⁽³⁾、N. T. ライトとキャサリン・グリーブに代表される物語アプローチ (narrative approaches) である。他にもジョン・ウェスレー、ジョン・コレンソなどにも言及がある。ローマ人への手紙解釈で、解釈が分かれる箇所12を選び、上記の解釈者の各箇所の解釈を著者は簡潔に解説している。ローマ書解釈史上で争点となってきたと著者が判断し、特定した箇所 (locus) は、「ユダヤ人をはじめギリシャ人にも (1章16節～17節)」, 「自然神学 (1章19節～21節)」, 「キリスト義認 (3章21節～28節)」, 「すべての人が罪を犯した (5章12節)」, 「すべての人と多くの人 (5章18節～21節)」, 「闘う (律) 法 (7章7節～8章4節)」, 「召命, 予知, 予定 (8章28節～30節)」, 「人間の願いや努力によるのではなく (9章16節～19節)」, 「陶器を作る者と土 (9章20節～23節)」, 「キリストは律法の『テロス』 (10章4節)」, 「イスラエルの救い (11章25節～27節)」, 「『プシュケー』はみな権威に従うべき (13章1節～7節)」である。本書は、以上の12箇所

(3) ‘New Perspective’ とは、ダンの表現であるが、サンダースが *Paul and Palestinian Judaism: A Comparison of Patterns of Religion* (Augsburg Fortress: 1977) で提唱した新約時代のユダヤ教の新しい理解に基づくパウロ理解・解釈のことである。サンダースによると、当時のユダヤ教とはルター以来プロテスタントの伝統で断罪してきた律法主義ではない。当時のユダヤ教でも、人間が自らの努力で功德を積んで神の御前に認められて救われるなどとは信じていなかった。そうではなくて、あくまでも神の憐れみの故に救われると理解されていた。敬虔なユダヤ教徒の家庭に生まれ、ユダヤ教徒として育てられること自体、神の憐れみ以外の何物でもない。神の恵みによる選びの結果と理解されていた、と。律法を遵守するのは、神の恵みの契約のうちに入る手段ではなく、契約のうちに留まり続けるためであった。このようなユダヤ教理解を covenantal nomism (契約規範主義) とサンダースは表現した。神との契約に入ることは恵みにより、契約のうちに留まり続けるには律法遵守が必要である、と。サンダースのユダヤ教理解は、ルター以来の伝統的なプロテスタントのパウロ理解に大きなチャレンジとなった。

各々に1章が費やされている。そして、前に序説が、後に結論が置かれて本書全体が構成されている。そして、これらの人々に代表される解釈が「ずっと回って (in full circle)」一巡している、と著者は論じている。分かり易く概観することができるようにダイアグラムが表示されている⁽⁴⁾。オリゲネスは、パウロがユダヤ人と異邦人との間を仲裁しようとしている手紙としてローマ人への手紙を読んでいる。オリゲネスの理解は、新しい視点や物語アプローチなどで近年重視されている解釈と類似している。中世、近代の神学的アプローチとは異なり、民族なりの集団に焦点が合わせられている。神の御前に個々人が罪人であって、……というアウグスティヌス、宗教改革のアプローチとは少々異なるが、当初パウロが意図した意味により近いと思われる。

この種の書物を批判するのは、決して難しくない。例えば、どうして著者はクルソストムスの解釈には余り触れていないのか、アンブロシアスター (Ambrosiaster) の注解書もっと大きく取り上げて良かったのではないか、バルトも良いが、ケーゼマンなど最近の解釈でより重要なアプローチが落ちているなどと批判することができる。あるいは、なぜ上記の12の箇所だけを取り扱っているのか、6章なども歴史上解釈に大きな幅が見出されるではないか、12章以降ではなぜ1カ所だけなのか、と。評者としては、本文がわずか150頁の本書で、これだけの内容を網羅した著者の労に敬意を表したい。著者が読破した関連文献の量、そしてそれらを簡潔に要約した労は容易に想像することはできない。このような書を執筆したことを大いに評価したい。ローマ書解釈の歴史としては不完全なものであるかもしれないが、限られた紙面で扱う以上は、当然の結果である。ローマ人への手紙を解釈する上で、重要な事柄、視点、特に神学的課題は十分に網羅されていると思う。ローマ書の主題は何かという問題、自然神学の是非に拘わる問題、信仰義認の意味、普遍主義

(4) 本書 xxvii 頁。

(救済論で言う)の是非、予定論の評価、神の主権と人間の自由意志との関係、福音と律法との関係、抵抗権という課題……やはり、新約学者であり、ローマ書と専門的に取り組んできた著者が執筆した解釈史である。読む者にローマ書解釈について明確な指針を提供している。ローマ書を実際に講義する教師が、ローマ書学習者を想定して副読本として書いただけのことはある。聖書、特にローマ書を解釈するとは、ギリシャ語の語彙と文法を正しく分析し、「正しい」釈義の方法を用いれば、あるいは「正しい」注解書が一冊あれば、事足りる、「正しい」注解書を一冊読めば、十分だということではない。読む者に、ローマ書解釈という厳しい現実を突きつけて、チャレンジする書である。

解釈の歴史を扱うから、著者の視点、解釈を覆い隠して、中立公平に歴史を概観している、という錯覚に読者を陥らせることもしていない。ローマ書をどう読むべきか、という著者の立場は、解釈の歴史を辿る過程で見え隠れしてくる。著者が気に入っている解釈者は、明らかにオリゲネスである。神の御前に罪人である個々人が如何に救われるか、というルター的問いにローマ書でパウロが答えているのではない。キリストの十字架・復活という救いのみわざの結果、従来のユダヤ教はどうなるのか、福音の光に照らすとユダヤ人と異邦人との関係はどうなるか、という課題をパウロが掘り下げていると読み、解釈している。例の ‘πίστις Χριστοῦ’ の理解についても、オリゲネス同様に⁽⁵⁾、主語格属格(「キリストの信仰」)と目的格属格(「キリストを信じる信仰」)の両方をリーズナーは読み取ろうとしている⁽⁶⁾。

ローマ書12章以降からは、13章冒頭のみを著者は具体的に取り上げている。このことはリーズナーに原因があるというよりは、二千年のキリスト教の歴史の過程でローマ書がどのように読まれてきたかを如実に明

(5) 24頁。

(6) 38~40頁。

らかにしている。1章から8章まで、あるいは11章までの神学的議論に読者、解釈者、説教者、神学者たちの注目が集中してきた。9章から11章までにしても予定論などの神学的視点から取り上げることはしても、歴史的イスラエル民族の救いの問題としては注目されてこなかった。イスラエル民族の救いの問題が中心的課題であり、ローマ書の補遺ではなく、むしろクライマックス的セクションだと再評価され始めたのは、第二次世界大戦以降のことである。著者は、結論と題した最後の章で、各解釈者たちを概観して、Not a Full Circle というセクションを最後に設けている。キリスト教が西欧の伝統的キリスト教世界の外であるアフリカ、アジア、ラテン・アメリカに伝わり、キリスト教会が成長していく中で今後ローマ人への手紙がどう読まれていくか。さらに12章以降の道德的、倫理的なパウロの奨励が再評価されていく過程で、ローマ書理解が深まることを著者は期待している。このようなより普遍的な広がりの中で、オリゲネスが着目したように、イスラエルの選びという具体的な焦点が教会にとっての謎であり続けるかもしれないと締め括っている。因みに、新約学者でありながら、宣教師の子供であるリーズナーは解釈者の文化、視点というものが解釈に多大の影響を与えることを意識していることが随所に見受けられた。

以上のような本書の特徴は、時期を前後して出版された同種の書と比較するとより明らかとなる。評者が念頭に置いているのは Jeffrey P. Greenman and Timothy Larsen (eds), *Reading Romans through the Centuries: From the Early Church to Karl Barth*⁽⁷⁾である。二人の編集者が「1章：序説」を書き記した後は、各々の執筆者たちが各注解者、神学者たちのローマ書の解釈の特徴を解説している。取り上げられている解釈者たちは、アンブロシアスター、ヨハネ・クルソストムス、アウグスティヌス、ト

(7) Grand Rapids, Michigan: Brazos Press, 2005. 巻末には索引がなく、書全体は目次、執筆者紹介、脚注を含めて223頁。

マス・アクィナス，マルティン・ルター，ウィリアム・ティンデル，
ジャン・カルヴァン，ジョン・ウェスレー，チャールズ・ホッジ，ジョ
ン・ウィリアム・コレンソ，カール・バルトの11人であり，担当執筆者
たちは（組織）神学者か教会史家である。ある意味ではリーズナーの著
書よりも，ローマ書解釈の歴史を学ぶことができるが，本書を読むこと
で，ローマ人への手紙の本文に取り組んで行く手助けとは余りならない。
各解釈者・神学者たちをより良く理解し，執筆した注解書・神学書など
を読んでいく助けにはなる。リーズナーの著書と比較して読んでみると，
たいへん興味深い。ぜひお奨めしたい。どちらか一冊を，ということど
であれば，ローマ書をより良く理解する手助けになるのはリーズナーの書
であるので，評者としてはリーズナーの方をお奨めしたい。